



その22

実 従

—じつじゅう—
1498年～1564年

(令和4年2月1日号—第337号)



実従^{じつじゅう}は、浄土真宗の教えを庶民に広めた本願寺第8世蓮如^{れんにょ}の末子（第27子）として、明応7年（1498）に生まれました。

実従^{じつじゅう}は、幼少期には大坂御坊（石山本願寺）で育てられました。永正3年（1506）に起きた教団改革の内紛に巻き込まれ大坂御坊を退出、京都で不遇の日々を送りましたが、同6年山科本願寺に移り、第9世実如^{じつによ}に仕えました。翌年に出家し、同13年には浄土真宗の聖典である『教行信証』^{きょうぎょうしんしょう}の相伝を受けます。

実如が亡くなった後、第10世証如^{しょうによ}に仕え、天文19年（1550）には、順興寺の寺号を与えられました。証如が亡くなった後は、第11世顕如^{けんによ}の後見人である慶寿院^{けいじゅいん}に『教行信証』を教授するなど本願寺の発展に尽力しました。

永禄2年（1559）12月9日、実従は枚方御坊（順興寺）に入寺し、67歳で亡くなるまでの5年間を枚方で過ごしました。その様子は実従の日記『私心記』^{ししんき}に記されています。

枚方には実従入寺以前から寺内町^{じないまち}が形成され、商人、職人のほか、金融や流通に携わる人々が集住していました。『私心記』には順興寺境内の造成、普請など環境整備をはじめ、実従と寺内衆による仏事やそれに伴う会食、囲碁や茶の湯、連歌などの様子が詳細に記され、当時の文化、寺内の生活がかいま見えます。



御坊山にある実従の墓とされる石塔
(場所は枚方元町4)

意賀美神社の梅



永禄3年2月3日、実従たちは酒食持参で万年寺に出かけ、梅見物をしました。また、同月28日には磯島の糸桜を見物に行き、舟で帰ってきています。

実従たちが訪れた万年寺は明治初年に廃寺となりましたが、梅の季節に万年寺山の^{おかみ}意賀美神社を訪れると、約100本の紅白梅を楽しむことができます。

枚方元町の^{ごぼうやま}御坊山の頂には、実従の墓とされる石塔が静かに建っています。